『ホトトギス』に掲載された寺田寅彦の俳句

四宮義正

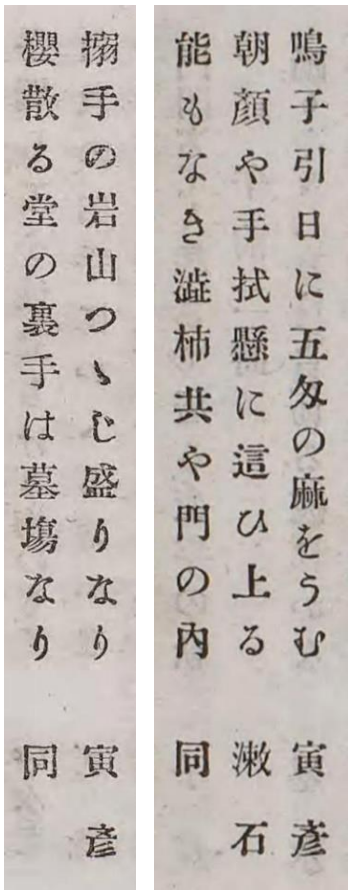
寺田寅彦の俳句デビューは『ホトトギス』である。（ただし、『寺田寅彦全集』によれば、同じ頃に『反省雑誌』『国民新聞』、新聞『日本』にも掲載があるようだ。）俳句に目覚める切っ掛けは「夏目漱石先生の追憶」（昭和7年）に詳しい。山田一郎『「藪柑子集」の研究』によれば、初めての訪問は明治31年の6月末か7月早々とのことである。つまり熊本・五高の2年生が終わろうとする時である。（当時は7月卒業、9月入学。）この時の俳句に関する問答は省略するが、ぜひ寅彦の文で読んでほしい。

同時代的資料としては、明治 30 年の日記は欠けているし、五高時代の日記に漱石はほとんど出てこないので俳句を教わった様子はよく分からない。別に俳句ノートがあって、それに書いていたのかもしれない。

山田一郎は「寅彦が持って行く句稿を、漱石は自分の句稿といっしょにして正岡子規のところへ送り、それに子規が朱を加えて返してくれた。そのうちの何句かが「日本」新聞の第一ページ下段の俳句欄に載せられた。」と書いている。漱石の添削もあっただろうし、子規は自分の選で『ホトトギス』へも掲載した。募集俳句の場合は虚子や鳴雪などの選もある。

現在『ホトトギス』は国立国会図書館のデジタルコレクションで簡便に見える。『全集』第11巻で掲載された年月が分かるし、当時の活字で見るのも面白いと思い調べてみた。

全集との違いは、俳号（筆名）や選者の記載があることで、関連記事（コメント）が書かれている場合もあった。またルビ（読み）はない。以下では全集の読みを追記した。近いところに漱石の句があれば併記してみた。（＊は筆者の注記）


鳴子引日に五匁の麻をうむ　寅彦
朝顔や手拭懸に這ひ上る　漱石
能もなき澁柿共や門の内　同
搦手の岩山つゝじ盛りなり　寅彦
櫻散る堂の裏手は墓場なり　同

1．明治31（1898）年10月号（2巻1号）

俳句（四十句）

鳴子引（なるこひき）日に五匁の麻をうむ　　寅彦

朝顔や手拭懸に這ひ上る　　漱石

能もなき渋柿共や門の内　　同

＊寅彦の句については、明治36（1903）年2月号（6巻6号）を参照。

2．明治32（1899）年3月号（2巻6号）

募集俳句　手（春季結）子規選

搦手（からめて）の岩山つゝじ盛りなり　　寅彦

桜散る堂の裏手は墓場なり　　同

3．明治32（1899）年5月号（2巻8号）

募集俳句　妓（春季結）　四方太　撰

菜の花や東（あずま）へ下る白拍子（しらびょうし）　寅彦

傾城（けいせい）の疱瘡うえる日永（ひなが）かな　同

船繋ぐ妓楼の裏や蘆（あし）の角（つの）　同

春風や遊女屋並ぶ向ふ河岸（がし）　同

募集俳句　妻（春季結）　子規選

革（あらたま）る妻が病や別霜（わかれじも）　寅彦

菜の花や東へ下る白拍子　寅彦
傾城の疱瘡うえる日永かな　同
船繋ぐ妓楼の裏や蘆の角　同
春風や遊女屋並ぶ向ふ河岸　同
革る妻が病や別霜　寅彦

募集俳句「妻」に就きて　子規

「革る妻の病や別霜」「革る妻の病や散る桜」珍らしき言葉の句が二句同じやうに出でたるは暗合にあらずして剽窃なるべし。一が他を剽窃したるか、二句共に剽窃なるかは知らず。さばれ「別霜」の五字面白かりければ此句だけ撰に入れぬ。

＊この号の「地方俳句界」麦飯会（丹波北桑田郡）に

短夜の雨戸しめたる女かな　寒月

が出ている。

後世からみたら、「やもり物語」（明治40年10月、『ホトトギス』に掲載）で、雨戸を閉める女中のお房さんのイメージがある句である。俳号といい偶然の一致であろう。

4．明治32（1899）年6月号（2巻9号）

募集俳句　牡丹　子規選

韓客（かんかく）の詩を題し去る牡丹哉　寅彦

募集俳句　薔薇（茨）　鳴雪撰

伴天連（バテレン）の墓をめぐりて野ばらかな　寅彦

韓客の詩を題し去る牡丹哉　寅彦
伴天連の墓をめぐりて野ばらかな　寅彦
乾鮭に弓矢の神を祭りけり　寅彦
天
草枯の道鄒に入る道祖神　寅彦
佛舍利を祭る卓や水仙花　寅彦
佛骨を洛に迎ふる小春かな　同

5．明治32（1899）年12月号（3巻3号）

募集俳句　神（冬季結）　子規選

乾鮭（からざけ）に弓矢の神を祭りけり　寅彦

天

草枯の道鄒に入る道祖神　寅彦

募集俳句　仏（冬季結）　虚子選

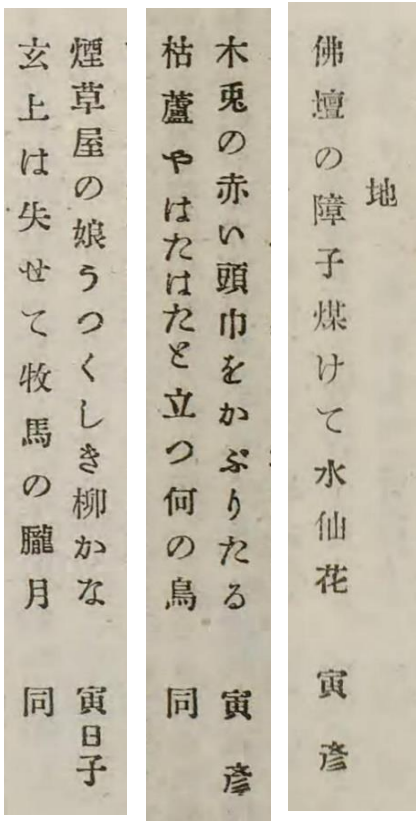
仏舍利を祭る卓（つくえ）や水仙花　寅彦

仏骨を洛に迎ふる小春かな　　同

　　地

仏壇の障子煤（すす）けて水仙花　　寅彦

＊天と地に選ばれているので上達ぶりが窺える。


地
佛壇の障子煤けて水仙花　寅彦
木兎の赤い頭巾をかぶりたる　寅彦
枯蘆やはたはたと立つ何の鳥　同
煙草屋の娘うつくしき柳かな　寅日子
玄上は失せて牧馬の朧月　同

6．明治33（1900）年3月号（3巻5号）

俳句

木兎（みみずく）の赤い頭巾をかぶりたる　　寅彦

枯蘆（かれあし）やはたはたと立つ何の鳥　　同

7．明治33（1900）年4月号（3巻6号）

俳句

煙草屋の娘うつくしき柳かな　　寅日子

玄上は失（う）せて牧場の朧月　　同

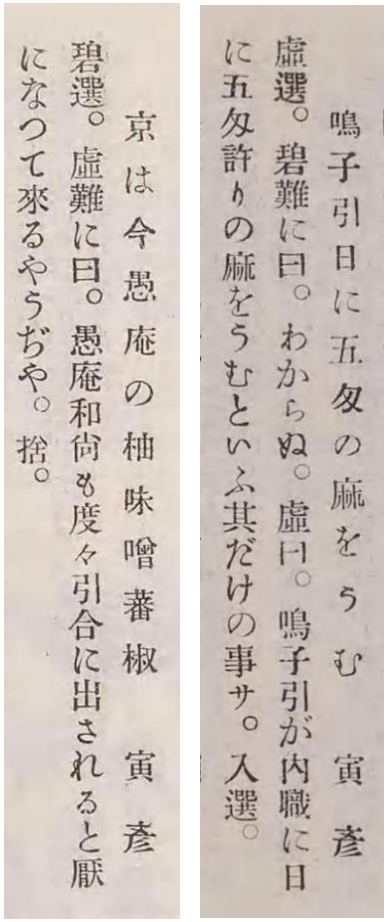
8．明治36（1903）年2月号（6巻6号）

「春夏秋冬」秋之部選句に就て

鳴子引日に五匁の麻をうむ　　寅彦

虚選。碧難に曰。わからぬ。虚曰。鳴子引が内職に日に五匁許りの麻をうむといふ其だけの事サ。入選。

＊筆者も意味がよく分からなかった。匁が重さなのか銭なのか。麻は「皮から繊維を採り、実は鳥の飼料とするほか、緩下剤として摩子仁丸の主薬とされる」（広辞苑）ようである。麻の栽培中に鳴子で鳥類の食害を減らすことで、取れ高が上がるという意味だろうか、と思ったりした。〈うむ〉が〈績む〉であれば、「麻・苧（からむし）などを細く裂き、長くつないでよりあわせる」（同）ことだから虚子の説になるのだろう。


鳴子引日に五匁の麻をうむ　寅彦
虚選。碧難に曰。わからぬ。虚曰。鳴子引が内職に日に五匁許りの麻をうむといふ其だけの事サ。入選。
京は今愚庵の柚味噌蕃椒　寅彦
碧選。虚難に曰。愚庵和尚も度々引合に出されると厭になつて來るやうぢや。捨。

京は今愚庵の柚味噌蕃椒（とうがらし）　　寅彦

碧選。虚難に曰。愚庵和尚も度々引合に出されると厭になつて来るやうぢゃ。捨。

9．明治40（1907）年1月（10巻4号）

御降

御降になるらん旗の垂れ具合　　漱石

隠れ住んで此御降や世に遠し　　同

御降や月代（つきしろ）寒き朝詣（あさもうで）　　寅日子
御降に尻ぞ濡れ行く草履取　　同

＊全１ページで、上段最後に漱石の２句、下段の最初に他の人の２句、その次に寅彦の２句がある。兼題の募集に応じたものだろう。漱石と一緒に作句したのかもしれない。御降（おさがり）は正月三箇日に降る雪または雨の忌詞。

御降になるらん旗の垂れ具合　漱石
隠れ住んで此御降や世に遠し　同

御降や月代寒き朝詣　寅日子
御降に尻ぞ濡れ行く草履取　同

10. 大正４（1915）年７月号（18巻10号）

地方俳句界　零余子選
曾遊（そうゆう）の友と憩ひし茂りかな　　藪柑子

＊本当に寅彦の作だろうか。よく見ると、前の方に、●蟷螂会（下総、豊和村）香取郡豊和村、瀧田夢風報。とある。句会の場所から考えて、寅彦とは別人の可能性が高いと思う。選者の零余子は長谷川階三、地方の句会に出掛けて、俳句の全国普及に走り回っていた。

この号に課題「刈田」で募集が出ている。この結果が10月号に出たのが次である。

曾遊の友と憩ひし茂りかな　藪柑子

11. 大正４（1915）年10月号（19巻１号）

刈田　鬼城選
山かげの虫田（むした）もいまは刈田かな　　藪柑子

＊これは兼題の応募作品である。同年７月号の藪柑子と同じ人の可能性が高いだろう。
全集の大正４年はこの２句だけしか掲載がない。前後の年も無いことから、作句していない時期と考えられ、この２句は、別人の作と考えるのが妥当ではないだろうか。

山かげの蟲田もいまは刈田かな　藪柑子

沢山の応募俳句を眺めていると、作者名は俳号だけなので、よほどの有名人は別にして、後世からみたら誰の作か不明でもったいないと思う。たとえ身内や子孫の人が見ても気が付かないだろう。また、違う人が同じ俳号を使用する可能性もあっただろうし、調査しても決定力に欠けることになる。

寅彦の句を全集と照合すると、語句に若干の異同がある。全集の出典が『ホトトギス』とは違うのかもしれない。

○参考文献

山田一郎『「藪柑子集」の研究』（1997年、高知市民図書館）（引用は、ｐ10、ｐ175）